



ひらどだい

令和3年度 学校だより 9月号 横浜市立平戸台小学校学校長 藤巻 孝之



寄り添う

校長 藤巻 孝之

2021年夏。今年も心動かされる出来事がたくさんありました。

勝利を、自分の限界を目指して挑戦するスポーツ選手の姿に感動する場面に何度も出あうことができました。そのたびに勇気や元気をもらい、夢や希望、あきらめない心をもつことの素晴らしさ、大切さを再認識することができました。

一方、各地で発生した自然災害により、多くの方が犠牲となりました。亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、今もなお避難生活を余儀なくされている方々の一日も早い復興を願わずにはられません。日頃の備えを超えてやってくる脅威に対し、私たちが今できることは何なのか、考えさせられることばかりでした。

そして、新型コロナウイルス感染症の猛威は、いまだ衰える気配はありません。

さまざまな出来事の中、その多くにかかわり、活躍されている方々があります。ボランティアです。ボランティアの歴史を紐解くと、長く複雑な様子も見えてきますが、現在では公共性、自発性、先駆性に支えられた共助社会づくり及び社会貢献をする人、またその活動と説明できるのではないのでしょうか。日本では1995年がボランティア元年と言われていています。この年の1月17日に阪神・淡路大震災が発生し、復興のために全国から多くのボランティアが駆け付けたことからこう呼ばれているそうです。ボランティア元年から数えると今年は26年目となります。今ではすっかりお馴染みで、身近で、私たち自身であったりします。日常生活において、なくてはならない存在となりました。

では、我々はなぜボランティアとなり、ボランティアをするのでしょうか。内閣府の「令和元年度市民の社会貢献に関する実態調査」によると最も多かった回答は「社会の役に立ちたかったから」でした。社会の一員として自覚し、そこに自ら役割を見出して取り組む、ということになるのでしょうか。続いて多かった回答は「自己啓発や自らの成長につながるため」でした。一見、自分個人のためと捉えがちな回答ですが、過去現在未来において自分にかかわる「ひと、もの、こと」のよりよいかかわりを生むためと考えれば、やはり相手意識につながる回答となるのでしょうか。いずれにしても、私たちは常に「寄り添う」ことに大きな必要感を感じているのではないのでしょうか。

「寄り添う」とは「限りなく相手の気持ちを思い、理解しよう、同じ立場に立とう」という意思をもってかかわること」だと思います。気軽に相手の気持ちがわかる、同じ立場になれる、とは言えません。だからこそ「寄り添う」ことならできるのだと思います。

たくさんのボランティア、寄り添う気持ちが集まる平戸台。今日から学校再開です。

学校再開を迎えるにあたり、メール配信等によりたくさんのお知らせ、お願いを发出了しました。特に健康観察や登下校については多大なご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。引き続き、皆様とともに子どもたちの安心安全な学校生活を支えていきたいと思っております。よろしく願いいたします。